

## 『久安百首』部類本から『千載和歌集』へ

—— 編集方針の継承と展開 ——

山本 晶子

『千載集』の編纂には、撰者俊成がその三十年以上前に関わっていた『久安百首』が重要な役割をはたしている。この中からは一二六首の歌が『千載集』に採られ、俊成が評価した歌の多い、有力な撰歌資料であったことが知られる。そして更に、俊成が崇徳院に命じられて、この百首の部類本を編むという作業を行っていることも、『千載集』の編纂に役立ったとみられるのである。

『久安百首』の歌題が主催者崇徳院から下された時点では、春・夏・秋・冬・恋・神祇・慶賀・釈教・無常・離別・羈旅・物名・短歌という題と、各々の歌数が指定されていたにとどまる。四季と恋については、当時の百首歌としては題の設定がかなり緩やかであった。

この百首は、俊成（当時は頼広）を含む十四人の百首歌を並べた個人別百首の形で、一一五〇（久安六）年に一旦成立した。そして、俊成が部類本を完成させたのは、一一五三（仁平三）年頃のことと推定されている<sup>1)</sup>。こちらは勅撰集等の一般の撰集と同様に、四季部・恋部・雑部で構成されている。このうち、神祇・慶賀・釈教・無常・離別・羈旅・物名・短歌が収められた雑部では、各歌題あたりの歌数が少ないということもあり、歌は題ごとに、個人別百首での作者順（作者の官位順<sup>2)</sup>）に従って並べられた。

一方、四季部と恋部では、個人別百首の構成を大幅に改め、一首一首の題材や主題を考慮して配置をし直すという作業が行われている。収録する歌を自ら選ぶことはできなかったものの、四季部と恋部を合わせると千首を超える大規模な歌集の編集は、俊成にとつて貴重な体験だったと思われる。

そこで、本稿においては、特に両者の四季部について編集方針を比較することにより、『久安百首』部類本から『千載集』に受け継がれた点、そして『千載集』で新たに持ち込まれた点を明らかにする。

引用する和歌本文と歌番号は、『千載集』については『新編国歌大観』に、『久安百首』部類本については『久安百首 校本と研究』（平安末期百首和歌研究会編、笠間書院）に拠る。なお、『久安百首』の歌には、稿者の私意により濁点を付す。

## 二

『久安百首』部類本四季部を編むにあたり俊成が行ったのは、各々の歌の題材や主題から歌題を判断し、同じ歌題のものを一つの歌群にまとめるという作業である。各歌群の冒頭には、「……をよめる」「……の心を」等の形で歌題を表す詞書を付し、一つの歌群の中では、基本的には作者の官位順に歌を並べている。但し、「桜」歌群（春歌下、七一首）や「月」歌群（秋歌上、五〇首）のような歌数の多い歌群では、季節や時間の進行に従って歌を数個の小歌群に分けるという処置を行い、各小歌群の内部での配列を官位順としている。つまり俊成は、作者の官位と歌の内容の両方について配慮しているのである。

『久安百首』部類本と『千載集』四季部の歌題配列と各々の歌数は、別に掲げる一覧表の通りである<sup>3)</sup>。



久安百首部類本	鶯川 一 蓮 四 夏夜月 四 水室 二 泉水 三 夏暮 五 六月祓 一 (秋上)	千載和歌集	清水 二 六月祓 三
立秋 一五 早秋 三 七夕 一八 萩 一六 女郎花 一四 藤袴 四 薄 六 萩 三 秋歌 七 (野分) 二 (燕) 二 (秋の野) 二 (秋の夕) 二 (秋の野) 二	立秋 一五 秋風 四 七夕 七 萩 三 薄 一 萩 一 女郎花 四 秋の野 五 秋の夕 一 野花 二 露 五 薄 一 秋の庭 二 薄 一		

久安百首部類本	(秋風) 二 (吾亦紅) 一 月 五〇 (秋下)	千載和歌集	秋風 一 秋の山 一 月 二八 (秋下)
朝顔 二 霧 七 露 八 初雁 九 駒迎 五 (秋下)	朝顔 二 霧 七 露 八 初雁 九 駒迎 五 秋田 四 虫 一八 菊 一 擗衣 五 十三夜 三 月 九 秋歌 四 (秋風) 二 (秋の夜) 二 (秋の野) 二 (秋の山) 一 秋歌 三	秋田 二 虫 六 月 二 十三夜 二 擗衣 五 秋夕 三 菊 五 秋思 一 紅葉 二八 九月尽 六	

久安百首部類本	(秋思) 二 九月尽 一五 (冬)	千載和歌集	(冬)
(冬の夜) 三 (冬の旅寝) 一 霰 九 水 一〇 水鳥 八 千鳥 八 雪 三〇 冬歌 二 (冬の述懐) 二 (冬の恋) 一 神楽 三 炭竈 八 埋火 一 冬歌 三 (冬の述懐) 一	初冬 一四 時雨 一〇 落葉 七 霜 七 冬歌 四 (冬の夜) 三 (冬の旅寝) 一 霰 九 水 一〇 水鳥 八 千鳥 八 雪 三〇 冬歌 二 (冬の述懐) 二 (冬の恋) 一 神楽 三 炭竈 八 埋火 一 冬歌 三 (冬の述懐) 一	初冬 八 霜 四 時雨 一七 落葉 一 霰 一 網代 一 鷹狩 三 千鳥 五 水鳥 九 冬月 一 米 四 霰 二 雪 二 早梅 一 歳暮 七	

久安百首部類本	千載和歌集
(春待つ鶯 一)	
(冬の池 一)	
歳暮 一六	

※久安百首部類本の歌題は、各歌群冒頭の詞書に従う。「春歌」「夏歌」等の、季節の指定のみは、その季節に固有の風物が配されて

いない歌や、述懐や恋の方に重点の置かれた歌に付けられたものである。これらの下位分類(括弧内)は、稿者が判断して記した。

三

一方、『千載集』編纂の際にあえて『久安百首』部類本の構成を受け継いだとみられる箇所も存在する。特に、両者の間で、夏部の「時鳥」題、秋部の「月」題の歌群がそれぞれ二つに分割されているという共通点が見られるのである。ここでは、そのうちの「時鳥」題を中心に検討を加えてみる。

この「時鳥」題の歌は、『久安百首』部類本と『千載集』では共に、「菖蒲」「花橘」「五月雨」題等を間に挟んで、二つの歌群に分けられている。歌の内容をみると、『久安百首』部類本での最初の「時鳥」歌群(三三三・三三六)はまず、以下のような歌で始まる。

世中にいかでいはれむほととぎす人よりさきにはつねきつと  
(三三三・季通)  
思寝の夢にやきかむ郭公まだうつには音づれもせず  
(三三六・教長)

まだ鳴かぬ時鳥を待ち望む心情を詠む、こうした歌の後、三三〇番以降に、話主が時鳥の声を聞いたことを示す歌が配される。

郭公雲井をわたる一声はそらみかとぞあやまたれける  
(三三〇・堀河)  
さらぬだにふす程もなき夏の夜をまたれてもなく時鳥かな  
(三三二・顕広)

三三〇番歌の時鳥は、この歌の話主自身が「空耳」ではないかと疑うほど、遠くの空でただ一声鳴いて過ぎ去っただけであった。三三二番歌の話主も、短いはずの夏の夜も時鳥は待ち遠しいと訴えている。この歌群には他にも、「きかぬ恨をかさねつるかな」(三三七)、「此暮に山ほととぎすきくやきかざや」(三三六)等、声を聞けない不満や、今日は聞けるかという期待を示す語句が散見し、声の描写では、「雲みのこゑのほのぐ」と(三三四)とあるように仄かに、或いは前掲の三三〇番歌のように「声」だけ聞いたと詠まれる。最初の歌群では、各々の話主が時鳥を心待ちにしている時期の歌、そして、鳴き始めてもまだ存分には聞いていない頃の歌が中心なのである。

それに対して、二つ目の「時鳥」歌群では、夏が深まってからの時鳥の歌が目立っている。

何事をぬれぎぬにきて時鳥たゞすの杜に鳴あかさらむ

さみだれのふるの社の郭公みかさの山をさしてなく也  
(三七〇・清輔)

永い間待ちこがれたはずの時鳥も、三七〇番歌では、あたかも必死に濡れ衣を晴らそうとするかのように、その名も「札の森」で一晩中「鳴き明かす」と歌われる。こうした歌がこの歌群に置かれるのは、明らかに時間の推移を考慮した結果の処置である。

同様のことは、三七一番歌のような、時鳥に五月雨の配された歌についてもいえよう。従来の勅撰集、つまり『詞花集』までの集に「五月雨」題の歌が収録されている場合、『後拾遺集』『金葉集』『詞花集』の三集、それは必ず「時鳥」題、「菖蒲」題等の後に配置されるのである。これらの集の夏部、「時鳥」題から「五月雨」題に至る部分の内訳は以下の通りである。

●『後拾遺集』

- 時鳥 二六首 (二七八～二〇三)
- 早苗 二首 (二〇四・二〇五)
- 五月雨 四首 (二〇六～二〇九)
- 『金葉集』(二度本)
- 時鳥 二三首 (二〇四～二二六)
- 菖蒲 八首 (二二七～二三四)
- 五月雨 六首 (二三五～二四〇)
- 『詞花集』
- 時鳥 八首 (五五～六二)
- 菖蒲 一首 (六三)
- 水鶏 一首 (六四)

五月雨 四首 (六五～六八)

こうした配置から、勅撰集での五月雨は、夏が深まってからの風物として扱われていることがわかる。『久安百首』部類本でも、これらの勅撰集と同様に、最初の「時鳥」歌群よりも後に「五月雨」歌群が置かれた。五月雨の中で鳴く時鳥を詠んだ三七一番歌は、その更に後方にある、二つ目の「時鳥」歌群に収録するのが自然だったのである。

『千載集』の「時鳥」歌群が二分されているのも、『久安百首』部類本の場合と同じく、時間の推移を考慮した処置である。

ほととぎすまはひさしき夏のをねぬにあげぬと誰かいひけん

(一四八・公通)

ほととぎすなほはつこ急をしのお山ゆふる雲のそこに鳴くなり

(一五七・守覚法親王)

なごりなくすぎぬなるかなほととぎすこぞかたらひしやどとしらずや

(一六二・実国)

すぐ明けるはずの夏の夜に時鳥の一声を待ちこがれる思い(一四八)、「雲の底」から聞こえる初声の仄かな響き(一五七)、去年と違いあつさりを通り過ぎてしまった時鳥への恨み言(一六二)など、『千載集』の場合も、最初の「時鳥」歌群(一四八～一六七)は、初声を待つ頃を詠む歌、鳴き始めてもまだ心満たされないと訴える歌を中心に構成されている。

二つ目の「時鳥」歌群(一八八～一九三)は「五月雨」題の直後に位置し、五月雨の絶え間の時鳥を詠ずる歌から始まる。

五月雨の雲のはれまに月さえて山ほととぎす空に鳴くなり

(一八八・成保)

五月雨の頃の時鳥を詠んだ歌は、この歌群にもう二首収録されている  
(一八九「さみだれのそら」、一九三「五月やみ」。中には、

あふさかの山ほととぎすなのるなりせきもる神やそらにとふらん

(一九〇・師時)

のように、夏のどの時期の時鳥とは特定できない歌もあるが、この歌群の時鳥詠六首の中にはもはや、その声を待ち遠しく思うという歌はない。声を聞きたりない話主の心情を詠んだものとしては、

なごてかくおもひそめけん時鳥ゆきのみやまの法のすまかは

(一九二・俊頼)

という歌があるが、まだ僅かにしか聞いていないことを示す字句はなく、詞書に記された「未飽郭公」の題も特に時期を限定するものではない。従って、この歌は、夏が深まってどんなに声を聞いてもなお満ち足りない心情の詠と解することも可能なのである。

いにしへを恋ひつつひとりこえくればなきあふ山のほととぎすかな

(一九一・慶運)

も、あつさりと飛び去るのではなく、山中で盛んに「鳴きあふ」時鳥を詠む。『千載集』においても、二つ目の「時鳥」歌群には、五月雨と時鳥とを取り合わせた歌、或いは盛んに鳴く時鳥の歌、つまり、最初の歌群と比べて遅い時期の時鳥を詠んだ歌が主に収録されている。単に歌群が二分されているということだけでなく、こうした形になった理由も、『久安百首』部類本の場合と同様なのである。

「月」題についても、『久安百首』部類本と『千載集』とは同じ原則のもとに歌群が分けられている。

『久安百首』部類本の「月」歌群は、秋上(五一七〜五六六)と秋下

(六五三〜六六一)の二箇所位置に置かれている。秋上の歌群では、「月」題の本意に適った、冴えわたる月光の美しさや清らかさを詠ずる歌が中心となっている。また、時期・時間を字句から特定できる歌については、月の出、宵の口、或いは初秋の月を歌うものが、特にこの歌群の初めの方に多い。例えば、

秋くればおもひなしかも夕づくよのこりおほかる気色なるかな

(五一七・崇徳院)

武蔵野の葛の青葉の下晴て裏までさゆる月をこそみれ

(五二五・親隆)

などである。一方、秋下に置かれた月の歌は、

げにやさぞにしに心はいそがるゝかたぶく月も今はおしまじ

(六五六・教長)

長月の在明の空のけしきをおくのゑびすも哀とやみん

(六六〇・兵衛)

のように、多くが月の入り、有明の月、そして晩秋の月を詠んだものである。

『千載集』の場合も、「月」題は秋上と秋下に分かれる。そして秋上の歌群はやはり、

秋のよの心をつくすはじめとてほのかにみゆる夕づくよかな

(二七四・実家)

出でぬより月みよとこそさえにけれをばすて山のゆふぐれの空

(二七八・隆信)

のような、初秋や夕暮れの歌で始まる。但し、有明の月の歌や月の入りの歌までもが同じ歌群の末尾の方に収録されているという点は、『久安百首』部類本とはやや異なっている。しかし、『千載集』秋下の方に採られた二首、

むしのねもまれになりゆくあだし野にひとり秋なる月のかげかな

(三三四・道性法親王)

草も木もあきのすゑばはみえゆくに月こそ色もかはらざりけれ

(三三五・式子内親王)

は、共に、秋の終わりに命あるものが衰えてゆく中で、月だけが変わらぬ光を放っているという内容の歌であり、『久安百首』部類本の場合と同じく、俊成が作中の時間の推移を考慮して、「月」題の歌を秋部の上・下巻に分けたことがわかるのである。

#### 四

『久安百首』部類本と『千載集』の双方で歌群が分割されて配されたのは、前述の「時鳥」「月」の二題のみであるが、『千載集』には、同一歌題の歌が二箇所以上に分散している例が他にもある。その内訳は、次のごとくである。

夏部 清水 二一〇〽二二四〽三二二・三二二

秋部 秋風 二三一〽三三四〽三七二〽三〇四・三〇五

菫萱 二四二〽二四四〽二四六

薄 二四五〽二六八〽二七一

秋思 三〇二〽三三五

これらの歌題のうち、『久安百首』部類本でも独立した歌群を構成しているのは、「清水」（久安百首では「泉水」）、「菫萱」、「薄」の三題である。しかし、『久安百首』部類本ではこのうちのどれもが、分割されることなく一つの歌群にまとめられている。

『千載集』で二分された「清水」題の場合、水のほとりの涼しさという内容については、二つの歌群の間で特に相違はない。しかし、各々の前後

の歌との関係を見ると、最初の「清水」歌群の冒頭の歌、

山かげやいはもるし水おとさえて夏のほかなるひぐらしのこゑ

(二二〇・慈円)

の直前に、

あたりさへすずしかりけりひむろ山まかせし水のこぼるのみかは

(二〇九・公能)

という「水室」題の歌が載り、山中の水が題材とされた点が共通している。また、直後の歌群「夏月」題との関連で最初の「清水」歌群に配されたと判断できる歌には、

さらぬだにひかりすずしき夏の夜の月をし水にやどしてぞみる

(二二三・顕昭)

がある。尤も、「夏月」歌群は二五からなので、直接連鎖しているというわけではないが。

二つ目の「清水」歌群、

いはたたく谷の水のみおとづれて夏にしられぬみ山べのさと

(二二一・教長)

いはまよりおちくるたきのしら糸はむすばでみるもすずしかりけり

(二二二・盛方)

の二首については、直後の「六月祓」題との関連は薄い。しかし、二二二番歌と、その直前に配された夏暮の歌、

あきかぜは浪とともにやこえぬらんまだきすずしきすゑの松山

(二二〇・親盛)

は共に、季節の到来をめぐる歌である。勿論「清水」題も「夏暮」題も、涼しい情景が詠まれるのは当然のことであるが、秋風が吹いてきて涼しくなったという歌、夏（擬人化されている）が話主のいる山里を知らず、

訪れて来ないので涼しいのだという歌を並べるところに、撰者の配慮の跡が窺える。

「薄」題の歌は『久安百首』に一〇首収録されており、部類本では、その全てが一つの歌群にまとめられ、秋上の「萩」題や「女郎花」題等、秋の草花の歌群が並ぶ中に置かれている。その一方で、『千載集』に入る三首の薄詠は一首ずつ別々に離されている。『千載集』にも『久安百首』部類本と同様に、秋草の歌が並ぶ部分（二四二～二五四）はあるが、ここに収録された薄の歌は次の一首のみである。

秋きぬとかぜもつけてし山ざとになほほのめかす花すすきかな

（二四五・静賢）

これは、「蒔萱」歌群（二四二～二四四、二四六）の途中に配されている。この前後の歌は、それぞれ次の通りである。

ふみしだきあさゆくしかやすぎつらむしどろにみゆる野ぢのかるかや

（二四四・道経）

いかなればうはばをわたる秋かせにしたをれすらむ野べのかるかや

（二四六・詠人不知）

前の歌との関係は、二四四の「塵」が二四五の「山里」に関連する題材である、という程度で、特に密接ではないものの、後に配された歌とは、風と秋草の取り合わせが共通している。

なお、「蒔萱」歌群が「薄」題の二四五番歌一首のみを挟んだ形で分断されているのは、「蒔萱」歌群を二分しようとする意図があったからというよりも、この薄の歌の配置を考慮した結果なのであろう。

二六八・二七一の薄詠二首、

花すすきまねくはさがとしりながらとままる物は心なりけり

（二六八・道命）  
（二七一・伊家）  
いまはしもほにいでぬらむ東路のいはたのをのしののをすすき

は、秋の野をめぐる一連の歌（二六八～二七二）の中に組み入れられている。この二首のほかには、不在の間に荒れ果てた庭が野辺と化してしまつたという内容の歌（二六九、二七〇）と、「小野の浅茅生」の秋風を詠んだ歌（二七二）が配される。薄の歌二首の場合、二六八の詞書に「さが野の花をみて」とあり、歌本文の第二句には、本性の「さが」と歌枕「嵯峨」の掛詞が用いられているし、二七一にも歌枕「岩田の小野」が詠まれている。二六八～二七二番の一連は、直接には秋の野を歌題とするものではないが、野やその地名を表す語がどの歌にも用いられているという共通点を有するのである。

前述の「時鳥」題・「月」題の歌は、『久安百首』部類本と『千載集』の双方において二つの歌群に分割されていたが、この「薄」題・「清水」題は、『久安百首』部類本にはそれぞれ一まとまりの歌群として収録され、『千載集』では二箇所・三箇所に分けられている。そして、「時鳥」題・「月」題が時間の推移を考慮した結果二分されたのに対し、『千載集』での「清水」題・「薄」題の歌の位置は、不十分な箇所もあるものの、基本的には語句の連鎖を重視して定められているのである。

### 五

次に、『久安百首』から『千載集』に採られた個々の歌の配列について、部類本所収時と『千載集』採録後との比較を試みる。

『千載集』四季部には、七〇首の久安百首歌が入集しており、特定の季節や題材に偏ることなく、様々な歌群の中に配されている。また、複数二

（五首）の久安百首歌が連続している部分が、四季部には十五箇所みられる。

『久安百首』から採られた五首が隣り合つて並ぶ「五月雨」題の場合、部類本での歌の前後の順が、『千載集』においても全く入れ替わっていない。

さみだれの日かずへぬればかりつみししづやのこすげくちやしぬらん

（一八一／三四八・顕輔）

五月雨にみづのみづかさまさるらしみをのしるしもみえずなりゆく

（一八二／三四九・親隆）

さみだれはたくもの煙うちしめりしほたれまさるすまのうらら

（一八三／三五〇・俊成）

時しもあれ水のみこもかりあげてほさでくたしつ五月雨のそら

（一八四／三五二・清輔）

さみだれはあまのもしほ木くちにけりうらべに煙たえてほへぬ

（一八五／三五七・安芸）

〔括弧内の歌番号は、千載集／久安百首部類本の順。これ以降の引用例についても同様〕

『久安百首』部類本の「五月雨」歌群（三四八〜三五八の十一首）では、

歌は顕輔・親隆・顕広・実清・清輔・堀河（二首）・兵衛・安芸（二首）

・小大進の順、つまり作者の官位順に並べられ、それぞれ二首ずつが入る堀河と安芸の歌も、個人別百首の内部での順序通りに配列されている。『千載集』に入集した一群はこの順序のまま配列されているのだから、歌を配列するにあたって、俊成は、個々の歌の内容等を特に考慮していないようにも見える。しかし、この箇所に関して青木賢豪氏が「歌詞を通してわかるように、時間の経過を骨子にした展開」と考えられると指摘された通り、

この五首は、降り続く雨の影響が次第に顕著になってゆくという配列なのである。例えば一八一と一八四は、折角刈つておいた「小萱」や「水菰」が長い五月雨に朽ちてゆくという、類似の状況についての歌であるが、一八一が「朽ちやしぬらん」という危惧にとどまるのに対し、一八四は干すこともないまま本当に腐らせてしまったという内容である。また、一八三・一八五では共に、藁塩を焼く煙と五月雨とを取り合わせるが、一八三で「うち湿り」と詠まれた煙は、一八五の中では降り続く雨にすっかり絶えてしまっている。更に、これら一連の久安百首歌の直後には、

五月雨にむろの八島をみわたせば煙はなみのうへよりぞたつ

（一八六・行院）

という歌が配される。野中の清水が蒸発して煙のように見えるという室の八島が、雨水を湛えて湖と化してしまったと誇張するこの歌で、五月雨の著しきは頂点に達する。前述の五首の配列は、『久安百首』所収時の、作者の官位順という原則を保ちつつ、時間の推移にも従っており、久安百首歌ではない一八六番歌をも併せて、次第に夏が深まってゆくという構成となっている。部類本での前後関係を崩さずに並べても季節の進行には全く矛盾しないので、一八一〜一八五番歌は元のままの順序とされたのである。

この「五月雨」歌群の中でも、特に三四八〜三五〇の三首は、『久安百首』部類本で連続して配されており、『千載集』にも同じ順序のまま持ち込まれた。こうした例は他にも、四季部にはいくつも見出せる。

あさゆふに花まつころはおもひねの夢のうちにぞさきはじめける

（四一／一三五・崇徳院）

いつかたに花さきぬらんとおもふよりよもの山辺にちる心かな

（四二／一三六・堀河）

この二首は『久安百首』部類本と『千載集』の両方で、「花」歌群の冒頭に置かれている。話主の夢の中だけに咲きそめた花を詠む四一番歌から、「四方の山辺」のどこかにもう咲いているかもしれない花を尋ねて心がさまよい出すという四二番歌へ、各々の話主の花を慕う心情が高まってゆく展開である。『久安百首』部類本で、この二首の直後に配される歌には、一三七「待程のひさしき」、一三八「花待程はかぎりなきかな」という、長い間花を待っていることを示す字句がある。より時間の経過している内容の歌が、後方に置かれているわけである。

『千載集』では、話主が花を待つという段階の歌は四一・四二のみである。その直後には、

山ざくらたづぬときくにさそはれぬ老のこころのあくがるるかな

(四三・師実)

という歌が配される。この話主がまだ花を見ていないことも、心が落ち着かなくなってしまうという表現も、四二番歌と共通である。しかし、四二番歌では、花が実際にもう咲いているのかどうかがこの歌の話主にとって不明であるのに対し、四三番歌は、花見に誘われなかったという設定での歌である。つまり、花は既に咲いているというわけである。『久安百首』から採られた四一・四二番歌は、『久安百首』部類本の中に配されていた時と同様、『千載集』でも、時間の進行に沿った配列の中に組み込まれているのである。

六

尤も、同じ「花」歌群の歌でありながら、『久安百首』部類本で連続していた歌が『千載集』では離して配されている、以下のような場合もある(久安百首歌には\*印を付した)。

しら雲とみねにはみえてさくら花ちればふもとの雪にぞ有りける

(七九・伊通)

\*よし野やま花はななばにちりにけりたえだえのこるみねのしら雲

(八〇/一八二・季通)

山ざくらをしむこころのいくたびかちる木のもとにゆきかかるとん

(八一・周防)

はるさめにちる花みればかきくらしみぞれし空の心ちこそすれ

(八二・長家)

ふめばをしふまではゆかかんかたもなし心づくしの山ざくらかな

(八三・赤染衛門)

山ざくらちちに心のくだくるはちる花ごとにそふにや有るらん

(八四・匡房)

はなのちる木のしたかけはおのづからそめぬさくらの衣をぞきる

(八五・仲実)

春をへて花ちらましやおく山のかぜをさくらの心とおもはば

(八六・基俊)

あらしふくしがの山辺のさくら花ちれば雲井にさざ浪ぞたつ

(八七・公行)

\*春かぜに志賀の山ごえ花ちればみねにぞうらの浪はたちける

(八八/一八三・親隆)

さくらさくひらの山かぜ吹くままに花になりゆくしがのうら浪

(八九・良経)

八〇・八八番歌は、『久安百首』部類本においては、散る花を詠ずる一連の歌の中に隣り合って配されていた。しかるに、『千載集』の中での位置を見ると、八〇番歌は山桜から白雲や雪を連想している歌が並ぶ中(七

九〇八二)に置かれている。特に、直前の、「白雲と峰には見えて」の字句がある七九番歌とは、発想がよく似ている。

八八番歌も、共通の要素を持つ歌に前後を挟まれている。八七〇八九の三首はいずれも歌枕「志賀」を詠み込んだ歌であり、かつ、風に舞う落花を白波と見立てる歌なのである。しかも、八七番歌は空に舞う花吹雪を、八八番歌は山にも浦波の立つかと思われる落花を詠んだ歌であり、更に八九番歌は、湖面の波のほうに花に覆われてゆくという歌である。共通の歌枕や見立てを用いているのみならず、三首の配列を進ると、詠まれている風景が、順に、空から山、そして湖へと変化しているわけである。『千載集』の「花」歌群には、名所花の歌がまとめられた部分<sup>1</sup>が他にもあり、季節の推移に従うだけでなく、地名や風景といった、空間に関わる要素も意識した配列となっている。八八番歌が志賀の花をめぐる歌の一首として前述の位置に配されたのも、同じ意図に基づくものである。こうした工夫を、俊成は、『千載集』の配列に新たに取り入れたのである。

八〇・八八は『久安百首』部類本所収時、「桜」歌群のうち落花の歌をまとめた一群(一七五〇一九六)に属しており、この部分の中では、歌が作者の官位順に配列された結果、隣接することとなった。一方、『千載集』の「花」歌群では、基本的には時間の推移を基にした構成を保ちつつ、用いられた歌枕・語句・発想等の共通する歌が連続して並べられている。俊成が『久安百首』から歌を採る際、自ら編んだ『久安百首』部類本の構成をそのまま持ち込むばかりでなく、『千載集』編纂時に改めて配列方針を考慮していることが、この二首の位置が離されたことから判るのである。

## 七

本稿では、四季部の歌群の構成と、個々の歌の配列との二つの面を検討

し、『久安百首』部類本から『千載集』に至る間に見られる俊成の編集方針の変化について考察した。

俊成が『千載集』を編むにあたって『久安百首』部類本作成の経験を参考にしていることは、採られた久安百首歌や両者に共通の収録歌題の多さのみならず、「時鳥」・「月」の歌群が二分されていること、『久安百首』部類本で連続していた歌の順序が『千載集』に採られても変わっていない箇所があること、といった構成上の共通点からも窺える。そして、これらの箇所は、季節の変化、時間の推移を反映するという意図のもとに編集されていることがわかる。

一方、『千載集』編纂時に構成・配列の改められるところもあった。これらも、『久安百首』部類本では一箇所にとめられていた歌題が『千載集』では分割されたり、『久安百首』から『千載集』の同じ題の歌群に採られた複数の歌が順序を変えて配されたりすることがある、という具合に、歌群と個々の歌との両方に関して認められる。そしてこのような変化が生じているのは、語句の連鎖や作中の空間など、時間という要素以外のものを加味して編まれた部分なのである。

俊成は、季節や時間の進行を基準とした構成については『久安百首』部類本における自らの考え方をもち続けながらも、こうした編集方針を新たに『千載集』編纂に持ち込んだ。『久安百首』部類本を編んだ経験と、それ以降三十年余りの間に考えた歌の集の在り方とを、『千載集』において両立させようとしたのである。

## 【注】

1 谷山茂氏「久安百首部類本と千載集」(『谷山茂著作集二 藤原俊成人と作品』

- 所収、二七〇頁
- 2 個人別百首では、①崇徳院②公能③教長④顯輔⑤季通⑥隆季⑦親隆⑧実清⑨顯広⑩清輔⑪堀河⑫兵衛⑬安芸⑭小大進の順。但し、谷山茂氏の指摘（『久安百首部類本（翻刻）付考』注一掲出書所収、二五七頁）にあるように、個人別百首成立後に実清と顯広の官位が逆転したので、部類本では⑨顯広⑩実清となった。
  - 3 『千載集』四季部歌題の内訳については、風巻景次郎氏「八代集四季部の題における一事実」（『風巻景次郎全集6 新古今時代』所収）や、有吉保氏編『千載和歌集の基礎的研究』第一章の、同様の調査を参照したが、ここでは稿者の判断した歌題を基に作成した。
  - 4 表中で、『久安百首』部類本の歌題は詞書に記された通りのものであるが、『千載集』については、一般的と思われる歌題を記した。ここでは、「暮春」と「三月尽」、「首夏」と「夏衣」、「泉水」と「清水」等はそれぞれ同一歌題として数えた。第二句の「わた」は見せ消ち、脇に「過」とある。
  - 5 歌番号は『新編国歌大観』に拠る。
  - 7 この直後の、三三六・三三七も月を詠む歌であるが、詞書にそれぞれ「九月十三夜月宴待りけるに」、「十三夜のこころを」と記され、和歌本文にも「こよひの月の名にながるらん」（三三六）、「こよひ」よにたへずも有るかな」（三三七）という字句があることから、「十三夜」題とみなし、本稿での「月」歌群には含めていない。
  - 8 「千載集の撰集資料について―堀河・久安百首の場合―」（『文学・語学』四九）七四頁
  - 9 『久安百首』部類本では、花を待つ頃の歌五首（一三五〜一三九）が「桜」歌群の冒頭にまとめられている。その中では崇徳院・堀河（二首）、顯輔・実清の順、つまり官位とは異なる順序で歌が並べられていることから、この部分が時間の進行を反映しているのは偶然ではなく、俊成が部類本編纂時にも歌の内容を考慮した上で配列を行っていたと判断できる。
  - 10 六五〜六八、七四〜七六、一〇三〜一〇五の三箇所。なお、「花」歌群は一〇五までであるが、その直後にある春の思いの歌（一〇六）、呼子鳥の歌（一〇七）にも歌枕が詠み込まれている。